

編集後記

立教学院院長であられた故松平信久先生が、立教学院常務理事会に「立教学院一五〇年史」編纂についてなる文書を提出したのは、二〇一〇年七月二三日であった。そこでは、「一五〇年史」編纂の意義について次のように述べられている。

私立学校の改革と発展には、建学の精神を常に意識し、現代に生かすという視点が欠かせない。しかもその建学の精神は、自校史への確実な認識に裏付けられたものでなければならぬ。

「立教学院一五〇年史」は、立教学院が立教学院らしい改革と発展を遂げるための基盤を用意し、学院構成員のアイデンティティの拠り所を用意するものである。

「一五〇年史」は、「一二五五年史」で見送らざるを得なかった『通史』の編纂・刊行を中心に据え、またこれまで未掲載だった資料や新たに発見・整理された資料群を適宜編集・刊行することを目的とする。

松平先生の提言に沿って「一五〇年史」の編纂が進められ、一二年以上の歳月を経てようやく『立教学院百五十年史』（第一巻）が刊行されることになった。まことに感無量である。

立教学院では、一九九六年度から九九年度にかけて『立教学院百二十五五年史』（資料編全五冊、図録一冊）を刊行したが、本書はそれを前提に企画された立教学院の通史である。「一二五五年史」の編纂過程で通史の刊行も考えられていたが、当時の立教史に関する資料の調査・研究の状況では『立教学院百年史』の水準を超える通史を執筆するのは難しいと判断され、通史の刊行を創立一五〇年の記念事業にしてはどうかということになったのである。

「一五〇年史」の編纂が承認されると、立教学院常務理事会は編纂体制の整備に着手した。まず、常務理事会

に「立教学院一五〇年史刊行委員会」を設置し、そのもとに編纂事業全般の企画・検討を行う組織として「立教学院一五〇年史編纂委員会」を置いた。編纂委員会は、大学の各学部、大学・学院の主要な事務部局、小学校、池袋中学校・高等学校、新座中学校・高等学校、および学院外から、立教学院史資料センター長が推薦し、学院長の任命する委員をもつて構成された。そして、編纂委員会のもとに専門委員会が置かれ、編別構成、執筆者の選定など「一五〇年史」編纂の具体的な作業を検討し、実行していくことになった。立教学院史資料センターが編纂事業を進めていくにあたっての事務局を担い、二〇一一年一月二七日に第一回編纂委員会が開催された。

立教学院では、「一二五年史」刊行後、「立教学院の歴史および学院関係者の事蹟に関する資料の収集・保存・調査・研究などを通じて、本学院の発展に資すること」を目的とする立教学院史資料センターを立教大学に設置した。センターは、立教史にかかわる史料の調査や研究を進め、大学の自校史教育も担ってきた。「一五〇年史」の編纂事業は、こうしたセンターの調査・研究の成果がなかったならば、さらに困難をきわめていたと思われる。「一五〇年史」は、一八七四年の創立から二〇二四年までの立教学院一五〇年の歴史を、旧制時代（戦前期）を第一巻、戦後についてはおよそ戦後復興・高度成長期にあたる一九六〇年代後半までを第二巻、それ以降現在までを第三巻として刊行することになった。本書は、その第一巻で、戦前期の旧制時代の立教学院の歴史を明らかにしたものである。なお、この間「一五〇年史」の編纂事業の一環として、『立教学院一五〇年史資料集 THE SPIRIT OF MISSIONS 立教関係記事集成（抄訳付）』（全五巻、別巻）や『遠山郁三日記』（山川出版社）などの資料集も刊行されている。

原稿執筆が佳境に入った二〇一九年末から二〇二〇年の初めにかけて、突如新型コロナウイルスに襲われ、図書館や史料館が閉館となり、執筆の大きな障害となった。そのような事情にもかかわらず、玉稿をお寄せ下さった執筆者の方々には感謝の念に堪えない。また、編纂委員会や専門委員会の委員の方々にも、多くの有益なアドバイスをいただいた。

なお、本書の刊行にあたって、奈須恵子（文学部教授、立教学院史資料センター長）、岡部桂史（経済学部教授、同副センター長）、佐藤雄基（文学部教授、同運営委員）の先生方には、膨大な原稿をお読みいただき整理していただいた。また、大江満（首席編纂員）、宮川英一（助教）、田村俊行（同）、太田久元（同）、村上葵（アルバイト）、牟田俊平（同）、および原修（兼任課長）・住吉美和子（職員）の諸氏には事務局として煩雑な編纂業務をそつなく処理していただいた。末筆ではあるが、編纂業務を支えてくれたすべての方々から感謝の意を表す。

（立教学院百五十年史編纂委員長・老川慶喜）